

欧州から ニッポンをみる

『寛容とリベラルの 偽善を読み解く』

261

在仏コラムニスト 安部雅延

テロの敵は平和を愛する人

5月22日夜、英国・マンチェスターのコンサート会場で自爆テロが起き、世界中に衝撃を与えた。インドネシアでも警官を狙ったテロが起きた。今年はずでに英国・ロンドンのウエストミンスター橋に自動車が入るテロ事件が起きている。

テロが起きる度に、残酷なテロ行為への怒りを静め、平穏な日常を送ることが呼びかけられる。理由は、怒りを爆発させれば、テロを実行した過激派の思う壺だからだ。憎悪で動くテロリストを憎まず、何事もなかったかのように日常生活を送ることが重要という暗黙の了解がある。

憎悪の連鎖を断ち切るのは「寛容さ」「許す心だ」と説く人は多い。

民族紛争、宗教対立、人種差別という日本では、あまり馴染みのない事柄に直面する世界は、平和とはほど遠い状況だ。「寛容さ」や「許す心だ」は、キリスト教の教えから来たものだが、今はキリスト教とは切り離されている。

トランプ米大統領は「テロリストは敗者だ」と決めつける。弱肉強食の競争社会のアメリカならではの見方だが、テロリストになった若者たちの多くは、差別と貧困に苦しむ移民の2世、3世で、社会の底辺にうごめいていた人間たちだ。

アメリカ人の価値観からすれば、

逆境を乗り越えてこそ立派な人間と言っただろう。逆境を乗り越えられないような人間は逆に敗者として蔑まれる。単純な論理だが、自分の力で逆境を乗り越えられない人はどうなるのだろうか。

シリアやアフリカの紛争で、生活が不可能になった難民に「逆境を乗り越えられない敗者」と言うのだろうか。英国やフランス、ドイツの大都市郊外で差別と貧困に喘ぎながら生きる若者たちも、敗者予備軍と簡単に言えるのだろうか。

アメリカでも大都市の中でスラム化した黒人居住地域がある。彼らもまた、テロリストになりうるかもしれないが、敗者として放置すべきなのだろうか。家族の崩壊した家に産まれ、知能指数も高くなく、あらゆるスキルが低い人間も少なくない。

過去を辿れば教育の機会など一切与えられなかった奴隷だった先祖を持つのが黒人だ。アメリカでは成功した黒人もいるが、彼らの多くは白人の血が入っている。最初から何もない人間に逆境に負けず努力すれば報われるとは簡単に言えない。

欧米社会では、明らかにアラブ人は差別されている。差別の根拠は人

種とイスラム教にある。だが、単純な宗教対立とも言えない。昨年、最も厳格なカトリックの国といわれたアイルランドの国民投票で同性婚が合法化された。

同性婚を支持した人々は、性的マイノリティーであるLGBTの人々への差別をなくし、平等な市民権を与えるべきと主張している。ところがキリスト教の教議では同性愛は許されない。ヴァチカンは同性愛を教義としては認めないが、生来の場合にはマイノリティーとして認め、彼らに寄り添っていくとしている。同情的姿勢だ。

つまり、キリスト教の教義では、寛容さはあくまで教義に反した人間や、犯罪者を許すように実践しているにしか過ぎない。事実、同性愛者への差別には宗教的理由もある。日本のようなキリスト教の影響の少ない国からは見えにくい問題だ。

ところがアイルランドに象徴されるように、キリスト教の教義に則った価値観で、何かを判断することはなくなっている。いわゆる世俗化が進み、キリスト教が残した人権、人道主義、寛容さなどリベラルな価値観が主流となっているからだ。

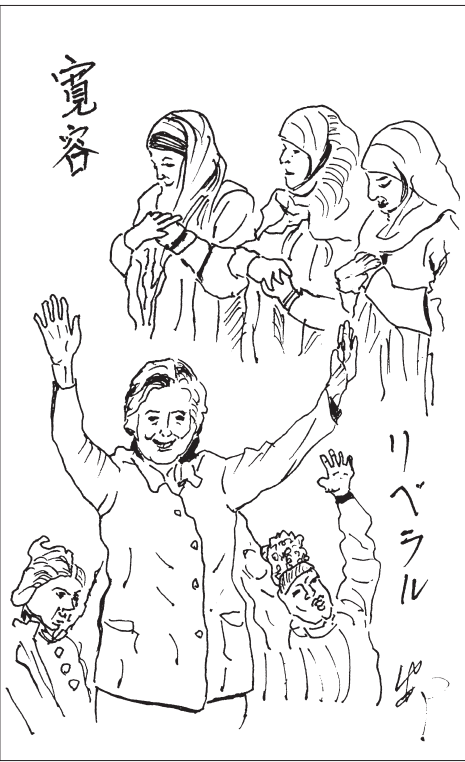
墮落したキリスト教徒

一方、イスラム教徒は西洋社会をどう見ているのか。イスラム教では女性は公衆の場で性的刺激を与える髪の毛や肌を見せてはならず、豚肉を食べないなどの戒律を厳格に守ることが求められている。

キリスト教徒も本来は似たような禁欲的規範が存在し、質素儉約に努め、極端に肌を見せる女性は不信仰で汚らな人間と蔑まれた。カトリック教会の礼拝では、女性はイスラム教徒同様、頭にベールを被っていた。アメリカ人歌手のコンサートで踊りまくるマンチェスターの10代の女の子たちは、キリスト教本来の基準

からはほど遠い。英国は10代の女の子の妊娠率で欧州トップ、股上の短いジーンズ発祥の地でもある。

リベラルの意味はキリスト教の窮屈な戒律からの開放の意味合いが強い。性的マイノリティーを認め、10代の妊娠も社会問題化はしない。アメリカでは禁欲よりも自由が尊重され、本来宗教において抑制されるべき人間の欲望が全て肯定されている。英国のイスラム教指導者たちは、公然と「墮落した西洋文明」「腐臭のする西洋社会」などと批判している。ところが批判される西洋人の側は世俗化が進み、女性にスカーフやブルカを強要するのはイスラム女性に対して人権侵害、時代後れと批判



し、およそ宗教とは関係のないリベラルな考えを主張している。

つまり、信仰を持つイスラム教徒からすれば、大半の西洋人は「墮落したキリスト教徒」ということになり。そんな西洋人に批判され、軽蔑されたくないというイスラム教徒の気持ちも当然と言える。

明確な世界観を持つ信仰者からすれば「寛容さ」を持つことは容易ではない。だから、西洋人が寛容さを口にする時、イスラム教徒には偽善的な響きに聞こえる。政教分離と世俗化の加速でリベラル思想が拡大し、確固たる信念は脇に追いやられた。

しかし、イスラム教徒も矛盾を抱えている。彼らの中には民主主義よりイスラム教の教義を国家理念とするイスラム国家をめざす者もいる。

一党独裁が当然な共産主義を信じる共産党が、言論の自由で民主主義国家の中に存在するのに似ている。

だから、アラブの春で強権政府がなくなると、イスラム革命をめざす過激なイスラム教徒がテロを繰り返すし、民主化される前に混乱状態に陥る。穏健派イスラムは西洋社会と共存し、西洋化、世俗化が進んだために結果として、イスラム過激派

のテロの標的に加えられている。

西洋のリベラル派の主張は、結果として、なんでもありの世界をめざしているように見える。ヘタをすればと1960年代、70年代に流行った過激な共産主義運動が伝統破壊を繰り返しながら、若者の腐敗をもたらした反面、何も建設できなかつたような事と同じにならねない。

今、西洋諸国に突きつけられた難民、移民問題やテロの脅威、イスラム教からの批判を、野蠻と文明社会の対立などとするのは大きな間違いだ。寛容さもリベラルも文明の進化から産まれたものと思われがちだが、偽善的響きも見え隠れする。

なぜなら、イスラム世界を軽蔑する西洋先進国も多くの問題を抱えており、それを移民のせいにするのはお門違いだ。宗教を社会の隅に追いや、自由を謳歌する彼らは、むしろ、若者を墮落させ、勝者と敗者を作り出し、極端な格差社会を作っている。

この議論で日本は蚊帳の外にいると考えられがちだが、実は日本はすでにリベラルでなんでもありの社会ができてきつつある。世界は難しい局面を迎えている。